

2010年度エコノメトリックスII&上級エコノメトリックスII  
第3回宿題(2010年10月22日出題)  
解答例

2009年11月12日

Q. 2.17

FWL定理を用いると、問題の回帰式の両辺に  $M_1$  を掛けた式

$$\begin{aligned} M_1 y &= M_1 \mathbf{1} + M_1 X_2 \beta_2 + M_1 u \\ &= M_1 X_2 \beta_2 + M_1 u \end{aligned}$$

における  $\beta_2$  の最小二乗推定量は、元の回帰式の  $\beta_2$  の最小二乗推定量と一致する。したがって、

$$\hat{\beta}_2 = (X_2' M_1 X_2)^{-1} X_2' M_1 y$$

書き直すと、

$$X_2' M_1 X_2 \hat{\beta}_2 = X_2' M_1 y \quad (1)$$

となる。

次に、元の回帰式の回帰残差について考えてみよう。説明変数ベクトルと残差ベクトルは直行するので、以下の式が成立する。

$$\mathbf{1}'(y - \hat{\beta}_1 - X_2 \hat{\beta}_2) = 0$$

この式は変形すると、以下のように書き換えることができる。

$$\mathbf{1}' \hat{\beta}_1 + \mathbf{1}' X_2 \hat{\beta}_2 = \mathbf{1}' y \quad (2)$$

$\mathbf{1}' \mathbf{1} = n$  であるから、(1)式と(2)式をつなげて以下の等式を作ることができる。

$$\begin{aligned} n \hat{\beta}_1 + \mathbf{1}' X_2 \hat{\beta}_2 &= \mathbf{1}' y \\ X_2' M_1 X_2 \hat{\beta}_2 &= X_2' M_1 y \end{aligned}$$

これは分割行列を使って以下のように表せる。

$$\begin{bmatrix} n & \mathbf{1}' X_2 \\ 0 & X_2' M_1 X_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \hat{\beta}_1 \\ \hat{\beta}_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \mathbf{1}' y \\ X_2' M_1 y \end{bmatrix}$$

これにより、設問の形で  $\hat{\beta}_1$  と  $\hat{\beta}_2$  を記述できることは明らか。

## Q. 2.19

$S(M_1X_2)$  上の全てのベクトルは  $k_2 \times 1$  ベクトル  $\gamma$  について  $M_1X_2\gamma$  と表すことができる。  
このようなベクトルに  $P_X - P_1$  をかけると、

$$\begin{aligned}(P_X - P_1)M_1X_2\gamma &= P_X M_1X_2\gamma = P_X(I - P_1)X_2\gamma \\ &= (X_2 - P_1X_2)\gamma = M_1X_2\gamma\end{aligned}$$

になることがわかる。

$P_1 + M_1 = I$  であるので、 $P_1M_1 = P_1(I - P_1) = O$  であることから最初の等式が導き出される。2番目と4番目の等式は  $M_1$  の定義から明らか。3番目の等式は (2.35) 式と  $P_X X_2 = X_2$  であることを使って得られる。これは  $X_2$  の各列は  $X$  の列でもあるので  $S(X)$  に属しており、 $P_X$  の下で不変であることによる。この結果、 $S(M_1X_2)$  の全てのベクトルが  $P_X - P_1$  の下で不変であることになる。これで、一つ目の確認ができたことになる。

次に  $X_2' M_1 z = 0$  となるような、 $S(M_1X_2)$  に直交するベクトル  $z$  を考えてみよう。 $(P_X - P_1)z = 0$  を証明するには、

$$P_X z = P_1 z \quad (1)$$

を証明すれば良い。(1) 式に左から  $X'$  をかけると、

$$X' P_X z = X' P_1 z \quad (2)$$

となつて、(1) 式であれば (2) 式が成立することは明らか。逆に (2) 式に  $X(X'X)^{-1}$  をかけると

$$P_X P_X z = P_X P_1 z$$

となるが、 $P_X$  がべき等であり、式 (2.35) より  $P_X P_1 = P_1$  であることから (1) 式が得られ、(1) 式と (2) 式が同値であることが得られた。

(2) 式を示すには

$$X' M_1 z = \begin{pmatrix} X_1' \\ X_2' \end{pmatrix} M_1 z = \begin{pmatrix} X_1' M_1 z \\ X_2' M_1 z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

に注目する。

上のブロック要素は  $M_1$  が  $X_1$  と annihilate するため、すなわち  $M_1 X_1 = O$  であるため 0 になる。下のブロック要素は、 $z$  が  $S(M_1X_2)$  に直交するという仮定のために 0 になる。したがって

$$0 = X' M_1 z = X'(I - P_1)z$$

となるが、 $X' P_X = X$  を代入すると

$$\begin{aligned}X' P_1 z &= X' z \\ &= X' P_X z\end{aligned}$$

のように (2) 式が導かれ、二つ目の確認ができ、以上で証明ができたことになる。

## Q. 2.26

FWL 定理より、(2.56) 式の回帰残差と (2.57) 式の回帰残差は計算上同一になる。いま、(2.57) 式における  $\beta$  の OLS 推定量を  $\tilde{\beta}$ 、OLS 残差を  $\tilde{u}$  であらわすと、

$$\tilde{u} \equiv M_t y - M_t X \tilde{\beta}$$

(2.56) 式の  $t$  番目の回帰残差は  $\tilde{u}_t$  に等しいから

$$\begin{aligned} \tilde{u}_t &= e_t' \tilde{u} \\ &= e_t' M_t (y - X \tilde{\beta}) = 0 \end{aligned}$$

が得られる。

次に  $y = X\beta + u$  の  $\beta$  の OLS 推定量を  $\hat{\beta}$ 、OLS 残差を  $\hat{u}$  で、また (2.56) 式における  $\alpha$  の OLS 推定量を  $\tilde{\alpha}$  であらわすと、 $\tilde{\alpha}e_t + \tilde{u}$  と  $\hat{u}$  の差は、(2.59) 式および (2.60) 式より

$$\begin{aligned} \tilde{\alpha}e_t + \tilde{u} - \hat{u} &= (y - X\tilde{\beta}) - (y - X\hat{\beta}) \\ &= X(\hat{\beta} - \tilde{\beta}) = \tilde{\alpha}P_X e_t \end{aligned}$$

が得られる。 $\tilde{u}_t = 0$  であることに注目すると

$$\begin{aligned} \tilde{\alpha} + \tilde{u}_t - \hat{u}_t &= \tilde{\alpha} - \hat{u}_t = e_t'(\tilde{\alpha}e_t + \tilde{u} - \hat{u}) \\ &= \tilde{\alpha}e_t'P_X e_t \\ &= \tilde{\alpha}h_t = \frac{h_t}{1 - h_t}\hat{u}_t \end{aligned}$$

が得られる。